

# 令和7年度 第2回入間市文化財保護審議委員会

## <次 第>

日 時 令和7年12月18日(金)  
午後1時30分～3時50分  
会 場 博物館 会議室

1 開 会

2 挨 拶

3 諮 問

入間市指定文化財の追加指定について

4 議 題

(1) 入間市指定文化財の追加指定について [資料1 P.1～3]

(2) 「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」の改定について [資料2 P.1～12]

5 報 告

(1) 旧黒須銀行復元改修事業の進捗状況について

(2) その他

6 その他

7 閉 会

## 理由書

資料 1

- 1 名称 藤沢橋石造物群
- 2 員数 道標1基、石碑1基、石塔2基、大日如来像1基  
(追加指定) さんかいばんれいとう 三界万霊塔1基、こうしんとう 庚申塔1基
- 3 種別 有形民俗文化財
- 4 所在地 入間市大字上藤沢31番地先(藤沢橋先)
- 5 管理者 入間市
- 6 追加指定の理由

藤沢橋石造物群は、県道川越入間線の藤沢橋のたもとに並んでいる道標1基、石碑1基、石塔2基、大日如来像1基からなる石造物群である。製作年代や由来、もとの造立された場所はそれぞれ異なるが、周辺の道路整備により現在の位置に集められたもので、藤沢橋付近の貴重な石造物として、平成15年に市指定有形民俗文化財に指定されている

今回追加指定を図るのは、藤沢橋石造物群のある位置から西側約60mの県道沿いに並んで建っていた三界万霊塔1基と庚申塔1基で、令和7年3月に県道の改修工事に当たり、藤沢橋石造物群の位置に移設されたものである。

三界万霊塔は、型式は山形角柱で、正面側には法印かんよ寛興が導師を務め、念心ほか14人の念仏供養の講中(仲間)が建立したことが刻まれている。さらに裏側には、中藤沢村の中林氏が願主となり、廻国供養成就記念と石橋供養を兼ねて宝暦2年(1752)8月20日に建てたことが刻まれている。左右側面に刻まれた入間市をはじめ所沢・飯能、狭山市等の16の村々や、総勢36人の人物は、願主中林氏との強い結びつきが推測される。

庚申塔は、型式は板石の文字塔で、中林弥兵衛が願主となって明治4年(1871)8月に建立したもので、碑面には、弥兵衛のほか3人の名が刻まれている。建立者が同姓であることから、近親者が関わったと考えられる。

これらは藤沢橋周辺に建てられた石造物であり、当地域の民間信仰の様相を伝える上で重要な資料である。今回の移設に伴い現在の藤沢橋石造物群とともに保存を図るため、追加指定するものである。

藤沢橋改修前の状況



藤沢橋改修後の状況



6 所在 上藤沢 沢田電器店前

形式 山形角柱

西暦 一七五二

寸法 高六五×幅二五×厚二三

(正面)

念佛同行

同 七兵衛

杉田□左衛門

供養道師

念心

同 兵右衛門

同 □太郎

三界萬靈

同 要助

同 傳右□□

同 金□九兵衛

法印寛與

同 權兵衛

同 庄右衛門

同 八郎□□

(裏面)

武州入間郡中藤澤村

天下泰平 寶曆二申天

奉納大乘妙典日本廻國石橋供養塔

國土安全 八月二十日

本願主中林□右衛門

(右側面)

双柳村 三□□

藤澤村 關谷孫左衛門

野田村 大師七左衛門

同 與右衛門

芋久保村 彌右衛門

同 新左衛門

小谷田村 上新井村

橋木六右衛門

新久村 林村

杉田次右衛門

扇町谷村 中村

中林長右衛門

水野村 堀之内村

中林次兵衛

上新井村 糞谷村

同 傳兵衛

林村 宮寺村

杉田□□□

(左側面)

□□ 平四郎

同 六右衛門

同 惣兵衛

金子源右衛門

石田 金兵衛

同 次右衛門

齋藤彌右衛門

關谷 市兵衛

同 八郎兵衛

同 八兵衛

同 伴右衛門

同 齊藤源四郎

齋藤武右衛門

同 □□□

同 今枝□右衛門

石田藤右衛門

關谷仁左衛門

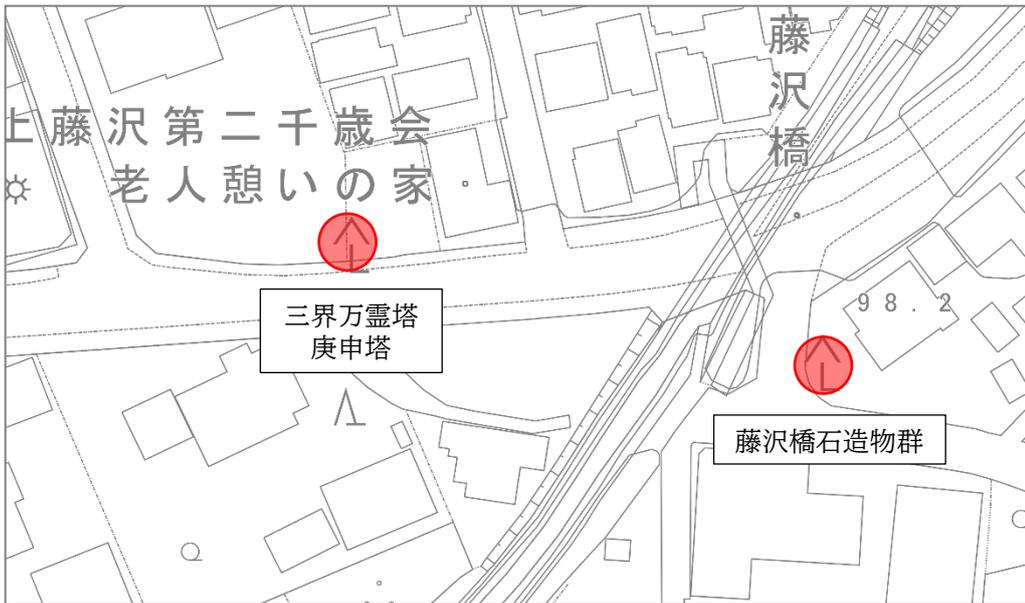
中林七左衛門

中村 正兵衛

同 □□□

田中 武兵衛

碑文 三界万靈塔



33 所在 上藤沢二六九 沢田電器店前

形式 板石

西暦 一八七一

寸法 高八八×幅二七×厚一五

(正面)

庚申

(裏面)

明治四年八月吉日

願主 中林 彌兵衛

同 勤九郎

同 中右衛門

同 治兵衛

碑文 庚申塔



藤沢橋改修前の位置関係

# 旧石川組製糸西洋館 保存活用計画

第1回からの修正点は  
アンダーラインで表示

(改定案)



令和8年〇月〇日

入間市教育委員会

## 凡例

- ・本文中の「復原」とは、痕跡や資料等の明確な根拠に基づき当初の状態に復することを意味し、「復元」とは明確な物理的痕跡は残っていないが蓋然性が高い復旧を意味する言葉として使用した
- ・会社名については変遷があるため、一番最後に使われていた「石川組製糸所」を採用した  
※共進社石川製糸場(明治45年)→合名会社石川組(明治45年)→株式会社石川組製糸所(大正12年)
- ・建造物の名称については国の登録文化財として登録された「旧石川組製糸西洋館」とした
- ・部屋の名称については、おおむね平成 11 年に行った「黒須西洋館建造物(旧石川組製糸西洋館)調査報告書」の表記に従ったが、一部変更したものがある。平成 11 年以降に改装された部屋についてはカッコ内に現状の名称を入れ、「旧和室(女子トイレ)」のように表記した。

## 目 次

1 計画の作成	.....
(1) 作成年月日	
(2) 作成者	
(3) 計画期間	
(4) 行政計画との関係	
(5) 計画の趣旨	
2 施設の概要	.....
(1) 名称	
(2) 所有者・管理者	
(3) 所在地	
(4) 建築年	
(5) 敷地面積	
(6) 施設内容	
(7) 計画の対象とする区域	
(8) 文化財の指定等	
(9) <u>登録時の解説</u>	
3 現在までの経過	.....
4 旧石川組製糸西洋館の概説	.....
(1)旧石川組製糸西洋館の概要	
(2)建造物について	
(3)外構について	
(4)旧石川組製糸西洋館の価値	
5 基本方針	.....
6 保存管理計画	.....
(1)保存の現状と課題	
①保存管理	
②環境保全	
③防災防犯	
(2)保存方針	

①対象となる範囲	
②基本方針	
③保存管理区分	
(3)建造物の保存計画	
①部分・部位	
②管理計画	
③修理計画	
(4)外構の保存計画	
(5)管理計画	
7 環境保全計画	.....
(1)基本方針	
(2)管理計画 修理計画	
8 防災・防犯計画	.....
(1)防火	
(2)防犯	
(3)耐震・耐風対策	
9 活用計画	.....
(1)活用の現状と課題	
(2)活用方針	
(3)活用内容	
10 保護に関する諸手続き	.....
11 管理運営	.....
(1)所管	
(2)公開の対応	
(3)撮影への貸出対応	
12 計画の実現に向けて	.....
(1)保存と活用について	
(2)運営体制について	
(3)財源の確保について	
(4)周辺文化財及び他の施設・機関との連携について	

## 1 計画の作成

- (1) 作成年月日 平成 30 年 (2018) 1 月 31 日  
令和 8 年 (2026) ○月○日 改定

○は、教育委員会での決定日をいれます

- (2) 作成者 入間市教育委員会 (博物館)  
(平成 30 年 (2018)、令和 8 年 (2026))

- (3) 計画期間 令和 8 年 (2026) 4 月 1 日～令和 18 年 (2036) 3 月 31 日の 10 年間

### (4) 行政計画との関係

本市「第 6 次入間市総合計画・後期基本計画」において、近代化遺産の保存・活用として西洋館は改修を実施したうえで一般公開を行い、地域の歴史を知る場や観光スポットとして市の魅力を発信するとされています。「入間市教育振興基本計画」でも、計画的な修繕を行い保存を図るとともに、同じく近代建築物である市指定文化財「旧黒須銀行」と一体となった魅力ある活用事業を実施し、市民文化の向上や観光の振興に繋げていくとしており、「第 2 期入間市博物館基本計画」では、一般公開や撮影への貸出等の活用を図りながら、文化財としての保存に取り組んでいくとしています。

「入間市都市計画マスタープラン」では「豊岡地域」のまちづくりにおいて、西洋館や旧黒須銀行、武蔵豊岡教会などの歴史的建造物がある地域については、景観の保全と活用を図るとされており、「第三次入間市環境基本計画」では、歴史・文化を大切に景観の保全として、旧石川組製糸西洋館、旧黒須銀行などの近代化遺産の保存、魅力ある活用事業に取り組むとされています。

また、令和 2 (2020) 年 3 月に策定された「埼玉県文化財保存活用大綱」では目指すべき方向性と取組として、文化財の適切な保存・活用が位置付けられており、計画的に保存（耐震含む）修理や復元整備を実施し文化財等を活用した魅力ある地域づくりに繋がるとあります。

### (5) 計画の趣旨

旧石川組製糸西洋館（以下、「西洋館」という。）は、明治から昭和初期にかけて当地方の産業を牽引する存在であった「石川組製糸所」を象徴する文化遺産です。

石川組製糸所は、明治 26 年（1893）に石川幾太郎が創始した会社で、生糸の生産・販売を通して経営規模を拡大し、最盛期には全国に 9 工場を有し、出荷高でも全国第 6 位になりました。生糸は主に外国に輸出しており、西洋館は取引先の外国人をもてなすために大正 10 年（1921）頃に建てられた迎賓館とされています。しかし、繁栄を謳歌していた石川組製糸所も、関東大震災による損失や昭和初期の金融恐慌、生糸に替わる化学繊維の誕生等の複合的な要因により業績を悪化させ、昭和 12 年（1937）に解散してしまったことから、石

川組製糸所を示す遺構はほとんど残っていません。

このような中、西洋館は石川組製糸所の繁栄を示すモニュメントとして、また入間市の近代史を象徴する文化遺産として非常に貴重な存在です。

さらに、建築学上も優れた建物として「国土の歴史的景観に寄与しているもの」であることから、国登録有形文化財（平成13年11月20日に「本館」「別館」のそれぞれが登録）になっています。

平成15年に所有者より市に建物が寄贈され管理・運営を行ってきましたが、経年劣化により様々な箇所に損傷が見られるとともに、寄贈された当初は本館で雨漏りが頻繁に発生するなど建物自体の保存が最大の課題となっていました。また、活用に必要な設備も不足していることから、それまでの活用は試行的・限定的なものに留まっていました。

このような中で平成29年度には国の「地方創生拠点整備交付金」を活用することで、懸案事項であった本館屋根の改修工事の実施と、併せて活用に必要な施設の整備を行いました。さらに今後の西洋館の保存と活用を図っていくための指針として、「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」を策定し、平成30年度からは一般公開や各種事業の実施など、本格的な活用を開始しています。

しかし、今後も恒久的な管理・運営を行うに当たり、石川組製糸所営業期の姿への復原や、平成29年度にはできなかった部分の修理、耐震化工事を実施する必要があることから、計画の改定を行ったものです。

なお、策定にあたっては、令和6年11月に市文化財保護審議委員会に諮問し、令和8年●月に答申を受けました。

## 2 施設の概要

(1) 名称 旧石川組製糸西洋館 本館・別館

(2) 所有者及び管理者

所有者 入間市（入間市豊岡一丁目16番1号）

管理者 入間市教育委員会博物館（入間市二本木100）

(3) 所在地 埼玉県入間市河原町13番13号

(4) 建築年 大正10年（1921）7月7日上棟

(5) 敷地面積 1,876 m<sup>2</sup>

(6) 施設内容 本館 延床面積 645.61 m<sup>2</sup>

（木造2階建て、一部地下1階。外壁 化粧タイル張り。屋根 洋瓦葺き）

別館 延床面積 148.76 m<sup>2</sup>

（木造平屋建て。外壁 化粧タイル張り。屋根 桧瓦葺き）

(7) 計画の対象とする区域

旧石川組製糸西洋館の敷地（1,876 m<sup>2</sup>） 別図1-1、1-2参照

(8) 文化財の指定等 本館 国登録有形文化財（建造物）

平成13年（2001）11月20日登録 登録番号11-0037号

別館 国登録有形文化財（建造物）

平成13年（2001）11月20日登録 登録番号11-0038号

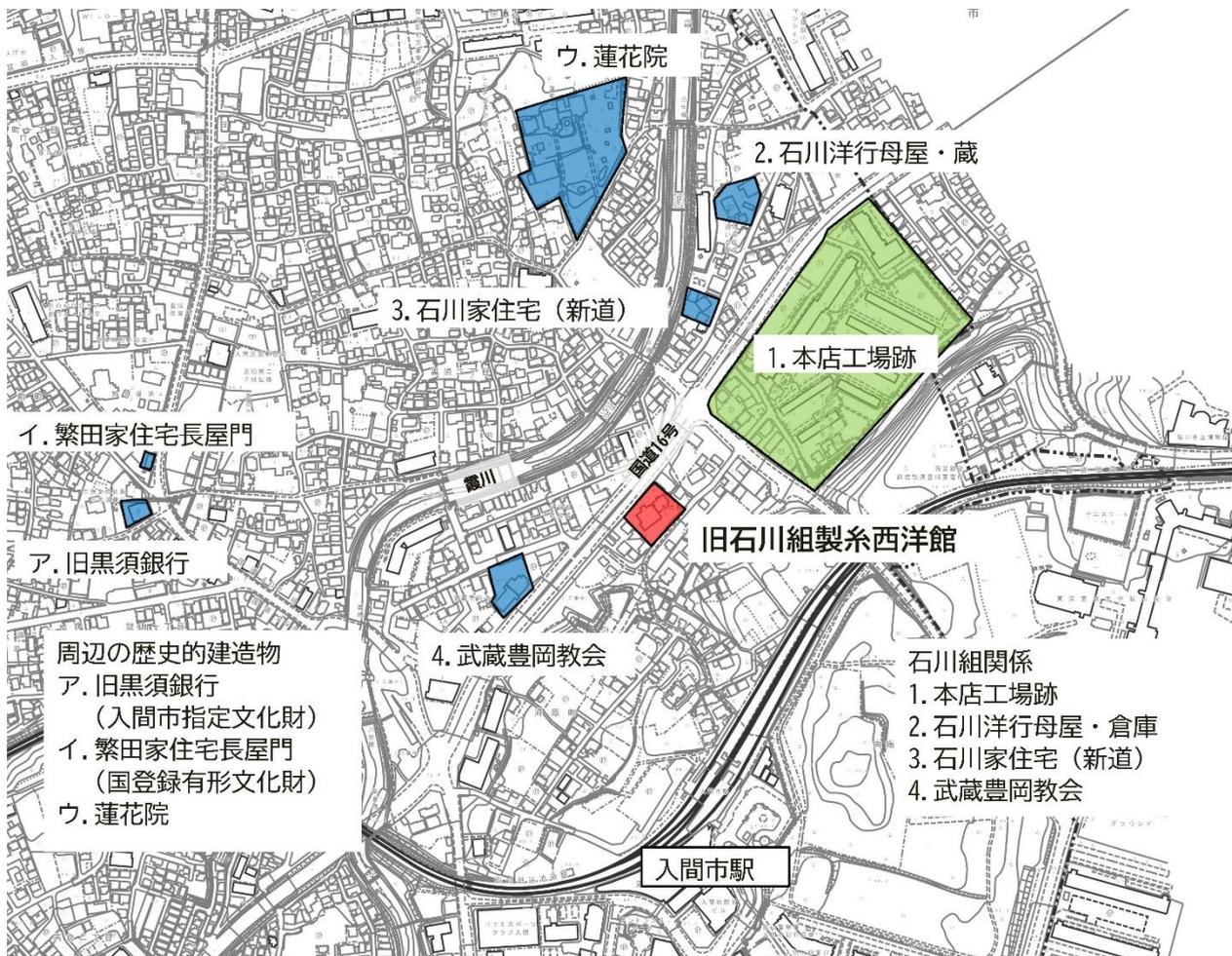
(9) 登録時の解説

近代における埼玉県内屈指の製糸会社の迎賓施設で、設計を室岡惣七として大正10年に建設された。木造2階建ての本館が北面して建ち、東に平屋建ての別館が接続し、ともにセピア色の化粧煉瓦張りで調和がとれている。本館の外観は屋根窓を設けた変化のある屋根に特色があり、別館とともに当地域の近代の景観を今に伝えている。

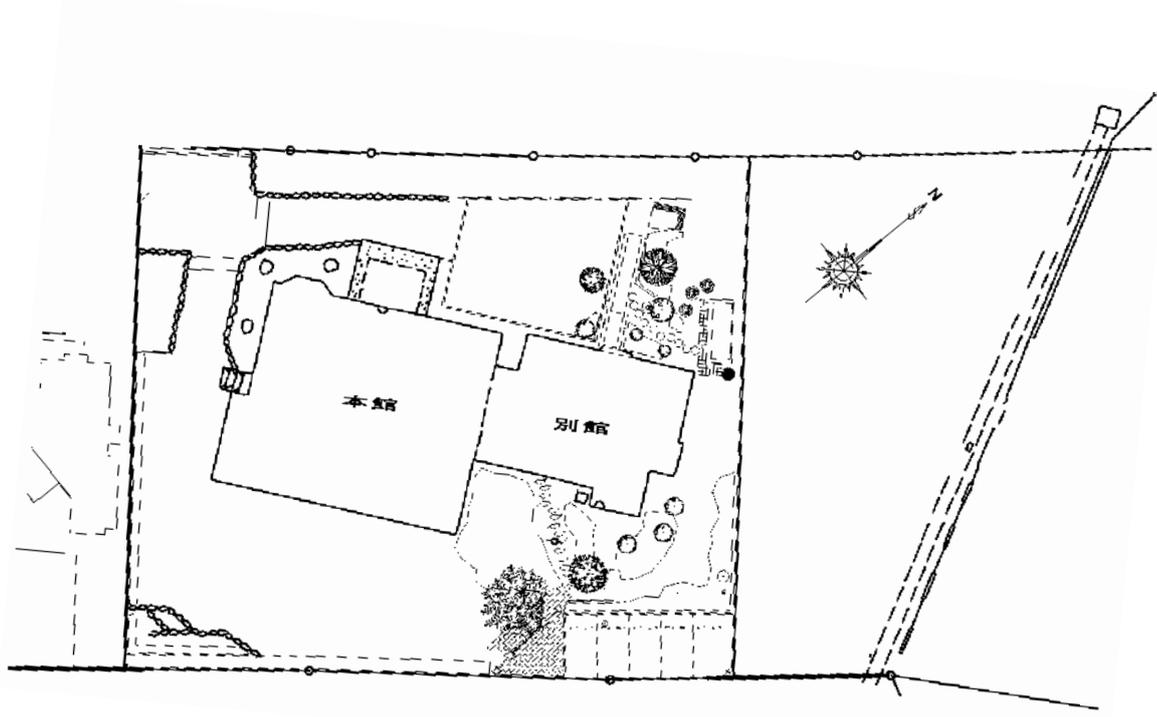


出典 文化庁文化財部監修 『月刊文化財』平成13年10月号、第一法規

別図1-1 位置図



別図1-2 計画区域図



### 3 現在までの経過

年	内容
明治 26 年 (1893)	石川幾太郎、座繰り製糸による操業開始
明治 27 年 (1894)	器械製糸に転換。共進社石川製糸場と称する
明治 45 年 (1912)	合名会社石川組設立
大正 10 年 (1921)	西洋館上棟 (7 月)。石川幾太郎が武蔵野鉄道第 3 代社長に就任
大正 12 年 (1923)	株式会社石川組製糸所と改称。横浜生糸出荷番付で全国 6 位。
○年から昭和 5 年の 間	東京環状線により北側の敷地が削られる
昭和 12 年 (1937)	株式会社石川組製糸所 解散
昭和 16 年 (1941)	西洋館が陸軍士官学校校長の宿舎となる
昭和 23 年 (1948)	石川源一郎が別館の北側に茶室を新築 (5 月) (平成 15 年解体) 西洋館が進駐軍に接収される (複数の将校が居住)
昭和 33 年 (1958)	西洋館が米軍から石川家に返却
昭和 54 年 (1979)	埼玉県教育委員会編『埼玉県明治建造物緊急調査報告書』に掲載
昭和 55 年 (1980)	日本建築学会編『日本近代建築総覧』に掲載
平成 6 年 (1994)	西洋館が入間市景観 50 選に選定
平成 8 年 (1996)	埼玉県教育委員会編『埼玉県の近代化遺産－近代化遺産総合調査 報告書－』に掲載 (3 次調査対象)
平成 11 年 (1999)	入間市による建造物調査で「黒須西洋館建造物 (旧石川組製糸西 洋館) 調査報告書」(榊文化財工学研究所) がまとめられる
平成 13 年 (2001)	「旧石川組製糸西洋館 本館・別館」が国の登録有形文化財に登録
平成 14 年 (2002)	市博物館が石川源一郎の茶室を調査(翌年の博物館紀要で報告) 石川本家と親族により『石川家の人々』が刊行される
平成 15 年 (2003)	所有者から市へ建物の寄贈を受け、用地を取得する 西洋館活用事業開始 (建物公開、撮影への貸出等)
平成 16 年 (2004)	市教育委員会生涯学習部で「旧石川組製糸西洋館」保存活用基本 構想及び「旧石川組製糸西洋館」改修計画を策定 「西洋館保存活用基本設計」作成
平成 17 年 (2005)	「西洋館外構工事実施設計」作成
平成 20 年 (2008)	市文化財保護審議委員会より市教育委員会へ「旧石川組製糸西洋 館の活用について (答申)」が出される
平成 29 年 (2017)	西洋館本館屋根及び別館等改修工事を実施 (平成 29 年 7 月～30

	<p>年3月。国の「地方創生拠点整備事業交付金」 市文化財保護審議委員会から「旧石川組製糸西洋館保存活用計画（案）」に係る意見を聴取する 埼玉県教育委員会による『埼玉県の近代和風建築－埼玉県近代和風建築総合調査報告書』に掲載（3次調査対象） 市博物館で特別展「石川組製糸ものがたり」開催</p>
平成30年（2018）	<p>市教育委員会で「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」を策定 「入間市旧石川組製糸西洋館条例」「同施行規則」を施行 一般公開を開始。7月7日を「入間市西洋館の日」に制定</p>
令和8年（2026）	<p>市教育委員会で「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」改定が策定</p>

※市が行った工事については、6保存管理計画(1)保存管理であげる

※石川家・行政以外の動きとして下記のものがある

昭和●年（ ） 入間市立豊岡中学校染井佳夫教諭による石川製糸調査と教材発表  
平成10年（1998） 東海大学第二工学部建設工学科学生による卒業論文の調査（羽生修二教授）

## 4 旧石川組製糸西洋館の概説（文化財の概要）

### (1)石川組製糸西洋館の概要

#### ①石川組の歴史

明治時代の我が国の主要養蚕県は群馬県・長野県・福島県で、埼玉県はこれに次ぐ養蚕県であり、養蚕業は輸出用生糸の原料として大正時代末期から昭和初期に最盛期を迎えている。石川組製糸所の創業は、日本の製糸業が家内工業的な座繰り製糸から近代的な器械製糸へと転換しつつあった時代であった。

明治26年（1893）、埼玉県入間郡豊岡町黒須の石川幾太郎が小規模な座繰り製糸で操業を開始、翌年にはいち早く器械製糸に転換した。日清・日露戦争を経て釜数を増加、第一次世界大戦後の好景気に乗り、瞬く間に経営規模を拡大した。最盛期には市内3工場をはじめ県内の狭山・川越市、県外にも福島・愛知・三重・福岡県など、全国に9工場を持ち、大正11年度（1922）の横浜への生糸出荷高では全国6位になっている。

県内でも大正年間に生糸産額は二倍以上となったが、その中心は生産性の向上顕著な器械製糸工場で、500釜以上の大規模工場13の内、石川組以外は県の中央部と北部に立地し、大半が県外、特に信州資本の経営によるものだった。県西部の地元資本による石川組がいかにか健闘し、県の蚕糸業にとって特筆すべき会社であったかがわかるであろう。

さらに石川組は、高品質の生糸や優良蚕種の普及、労働環境の整備といった点で模範工場としても知られ、明治42年には競進社と共に大日本蚕糸会の優等賞を受賞している。

労働環境の面で注目されるのは、幾太郎の弟和助がキリスト教の信者であったことから、その影響で一族がクリスチャンであり、石川家の同族会社であった石川組製糸所では、経営や従業員の教育にキリスト教的色彩が強く現れている。「女工哀史」に例えられる過酷な労働はなく、工女のために家庭夜学校や日曜学校を開設するなど、慈愛に満ちた雇用形態が保たれていた。また、西洋館の西側にそびえる日本キリスト教団武蔵豊岡教会（大正10年・W.M.ヴォーリズ設計）の教会堂の建設に当っても石川家が尽力している。

なお、石川組製糸所は、関東大震災による損失（横浜で出荷待ちの商品が焼失）や昭和恐慌の影響、レーヨンなど化学繊維の登場で生糸の需要が減少したことにより経営不振に陥り、最終的には昭和12年（1937）に解散したと考えられている。

本店工場は埼玉繊維に事業移管後、昭和13年に郡是製糸に買収されたが、跡地は現在UR黒須団地になっている。石川本家では、豊岡治具ゲージ、豊岡飛行機製作所などを経て終戦後は豊岡物産株式会社に改組。主に進駐軍の仕事を請け負って業績を伸ばしたが現在は後継会社は無い。

現在、石川組関連の建物は市外には残っておらず、本店工場の事務所を曳家したという幾太郎の息子権吉（洋行）の母屋と権吉が建てた3階建ての繭倉庫、幾太郎の娘で女工総監督の役割をしたつめ（新道）の住宅が残っている。会社としての最盛期に建てられ、本家に残っていた唯一の建物がこの西洋館であり、貴重な遺産である。

西暦	元号	石川組製糸所の動き	国内外の動き
1893	明治26	石川幾太郎、座繰製糸による操業開始。釜数20	富岡製糸場民間に払下げ
1894	明治27	蒸気力による機械製糸に転換。釜数35 共進社石川製糸場と称する。	日清戦争(～1895)
1901	明治34	「新家工場(第2工場)」開設。釜数40	
1903	明治36	川越の御法川工場を借り操業。石川組製糸所と改称	
1904	明治37	軍用乾燥野菜を製造して陸軍へ納品	日露戦争(～1905)
1908	明治41	「川越工場(第3工場)」開設。釜数 260	
1909	明治 42	大日本蚕糸会埼玉支会第2回品評会で蚕糸優等賞受賞 石川幾太郎、埼玉県の産業功労賞受賞	
1911	明治44	本店工場に電話開設(豊岡3番)	豊岡町内に電話開通
1912	明治45 (大正1)	合名会社石川組設立。総竈数 985 陸軍特別大演習(川越)に際して侍従より勅諭を伝達される	
1913	大正2	石川幾太郎、大日本蚕糸会の第一種功績賞受賞	豊岡町内に電灯がともる
1914	大正3	福島県の「原町工場」操業開始(賃貸契約)	第一次世界大戦(～1919)
1915	大正4	「入間川工場(第4工場)」操業開始 「扇町屋工場(第5工場)」操業開始	武蔵野鉄道開通・豊岡町駅開業
1916	大正5	本店新工場、倉庫、大講堂を建築 「扇町屋工場(第5工場)」、「原町工場(第6工場)」を買収	
1917	大正6	石川幾太郎、緑綬褒章受章	
1918	大正7	愛知県の「豊橋工場(第7工場)」を買収	シベリア出兵
1920	大正9	合名会社を株式組織に改める 石川幾太郎、紺綬褒章受章	糸価未曾有の高騰
1921	大正10	三重県に「石川組中村製糸所(第8工場)」を開設 『西洋館』上棟(1922～23年頃完成)7月 石川幾太郎、武蔵野鉄道第3代社長就任(～昭和4年)	ワシントン軍縮会議
1922	大正11	海軍大将東郷平八郎来訪	
1923	大正12	株式会社石川組製糸所と改称 大正11年度横浜生糸出荷高で全国6位を記録 武蔵豊岡教会新会堂献堂	関東大震災→横浜の石川組の生糸 1,000 梱が焼失
1926	大正15 (昭和1)	池袋に東京事務所開設	生糸相場暴落

1928	昭和3	米国絹業家チェニー氏来訪	為替相場激変
1929	昭和4	従業員数 5,260 名(男 456 名、女 4,804 名)	世界恐慌始まる
1930	昭和5	経営苦境に陥る 福岡県粕屋郡席内村(現在の福岡県古賀市)に工場開設	ロンドン軍縮会議
1931	昭和6	各工場の整理が始まる	満州事変
1934	昭和9	石川幾太郎永眠(行年78歳)	
1937	昭和12	株式会社石川組製糸所 解散	日中戦争始まる
1938	昭和 13	本店工場 郡是製糸が買収。2代目社長民三永眠(行年 57 歳)	

## ②施主石川幾太郎 安政2年(1855)～昭和9年(1934)

石川幾太郎は、浮き沈みの激しい製糸業界の中で石川組製糸所を日本屈指の大会社に発展させた実業家である。安政2年に、石川金右衛門・だいの長男として黒須村(現在の入間市黒須)で生まれた。生家は8代続く農家であったが、畑仕事の傍ら新河岸(川越)への馬曳きなどをして働きながら、黒須村の名望家繁田武平(満義)に通って教えを受けたという。戸主となった明治12年(1879)には、「実業界へ飛躍しよう」の志を持ち、製茶仲買商となった。一時はその経営に失敗したというが、同26年のコロンビア博覧会では茶で褒賞を受けており、詳細は不明ながら茶業は後年まで続けている。同23年、弟和助の影響でキリスト教に入信。同26年には石川組製糸所を創業した。大正元年(1912)の陸軍特別大演習では川越に行幸した大正天皇から地方功労者として勅諭を、大正2年には渋沢栄一や田島弥平らと共に大日本蚕糸会の第一種功績賞を受けている。



大正10年武蔵野鉄道(現西武鉄道)社長に就任。同13年には西川武十郎(現志木市)に次いで、県下第2位の大地主(211町歩)となる。同6年緑綬褒章受章。同9年紺綬褒章受章。昭和9年(1934)没。行年78歳。息子の権吉によると「勤儉力行型の人物で物を人一倍大切にし、事業についても極めて研究熱心で、事業の鬼というだけでなく、常に人間尊重を忘れなかった」という。趣味として、刀剣や書画骨董を愛し、多くの著名人や文化人とも交流があった。土木、消防、警察、教育等を支援し、郷土への利益還元をはかった